元福島民友新聞記者 紺野滋さん講演

「福島抑留所と遺跡保存の問題、原発事故後の状況」

2014 年 6 月 28 日　麻布台セミナーハウスにて

１　地方における文化財・戦跡をどう守るのか

福島と教会建築

紺野滋さん

福島市にはＰＯＷ研究会にとって関心の深い、外国人民間人抑留所とされた福島修道院があった。2008 年には研究会の皆さんにも見学に来ていただいたが、その修道院は震災で大きな被害を受け、2012 年月 1 月末に解体されてしまった。原発事故以降福島は全く変わってしまい、地域は放射線の問題で疲弊して、大切な史跡であることが分かっていても保存するエネルギーはない。

震災前福島には全国でも有数のキリスト教建築物があった。福島修道院以外の例を挙げると、

【福島教会】福島市宮下町所在のプロテスタントの教会。アメリカ人宣教師で建築家のヴォーリズ（後日本に帰化）の設計で 1909 年建立された。国の登録有形文化財だったが、震災の被害を受けて取り壊された。

【福島新町教会】上記と同じヴォーリズの設計により、福島市新町に 1928 年建立されたプロテスタント教会。ヴォーリズ全盛期の作品である。震災で大きな被害を受けたが、修復された。戦後の松川事件の際、仲間の犯行であると自供した被告にも刑務所の教戒師として接し、善導に努めたのがこの教会の牧師だった。

【福島聖ステパノ教会】福島市置賜町所在の聖公会の教会。日露戦争の頃である 1905 年に建立された。天井がすのこ状になっており和風建築の名残がある。震災でダメージはあったが現在も保たれている。

なぜこのように優れた教会建築が多いかというと、福島には隠れキリシタンの信仰が根付いていたからである。江戸時代初め弾圧を逃れようとして多くのキリシタンが、東北地方の銀山などに流れ込んできた。これまでに畑からメダイ（メダル）が出てきたり、山中から十字架を記した墓石が見つかっている。また明治時代には福島県の生糸商が横浜で、キリスト教や新思想に触れそれを広めた。そこから自由民権運動も起こった。

福島修道院取り壊しの経緯

福島市花園町のコングレガシオン･ド･ノートルダム修道院は､チェコ人スバガーの設計で 1935（昭和 10）年に建立された。スバガーの代表作とも言える大型建築だったが、震災で大きな被害を受けた。実は桜の聖母短大が設立された時この修道院を解体する案が浮上したが、その時は高齢のシスターが反対して記念館として残され、市民の学習の場などに使われていた。私たちは教会や修道院を市の新しい呼び物にしようと活動したが市民の理解に乏しく、公開プレゼンで活動費の補助金を申請しても認められなかった。

2011 年 3 月 11 日の震災で、正門の正面にあったマリア像は完全に壊れた。建物は一部漆喰が落ちて雨漏りがひどく、床下も傷んでカビも発生していた。保存運動を起したが、市民は震災と原発事故への対応で精一杯で関心は低かった。修道院側も震災で壊れた幼稚園を修復する方を優

先した。骨組みはしっかりしているとして全国建築学会から保存要請書が出されたが、それもむなしく、2011 年 11 月から翌 2012 年 1 月までかけて解体されてしまった。

解体中の修道院

福島市の個性的な戦跡

教会関係だけでなく、福島市や県内には個性的な戦跡が存在している。

福島市内の信夫山には中島飛行機が疎開しての地下工場があり、戦争末期にはゼロ戦のエンジンが製造されていた。この地下工場では福島中学校などの中学生が学徒勤労動員で働かされていた。食料不足による空腹で学生が空腹ダイナマイトを食べたという実話がある。甘い味がしたそうだ。

福島市は 1945 年 7 月 20 日に模擬原爆を投下されたが、戦争中の空襲はそれだけだった。この模擬原爆の爆発で田んぼにいた青年が 1 人亡くなった。模擬原爆の破片は渡利の瑞龍寺というお寺に保管されている。全国で唯一のものであり、重さ 15 キロもある。模擬原爆のこと自体があまり知られていない歴史なので、この実物資料は貴重である。

郡山市では駅の東方に軍需工場である保土谷化学の工場があり、4 月 12 日のＢ29 による空襲で 460 人が亡くなった。そのうち 30 人は学徒勤労動員された女子中学生らだった。保土谷化学の事務棟だけが奇跡的に焼失せず戦後も残っていた。しかし今回の震災で被害を受け結局取り壊された。取り壊わされると記事に書いたが、ほかのメディアは取り上げてくれず、保存することは出来なかった。一度無くなってしまった史跡はもう元に戻すことは出来ない。戦争体験者が居なくなっていく今日、戦争遺跡の重要さは増している。

私は 1995 年に激戦地だった硫黄島へ、2000 年にパプアニューギニアへ取材に行った。硫黄島へは戦闘終結 50 年の日米合同記念式典に参加して、自衛隊の輸送機で行った。戦争当時、地下壕は 40 度近い高温で、水も食料も無く自分の尿を飲むような状況だったらしい。壕の中に残っていた一升瓶は火炎放射器のようなもので焼かれ熱で溶けていた。私の父は戦車兵でラバウル（パプアニューギニアのニューブリテン島）でマラリアに感染し、終戦後ラバウル対岸のココポで捕虜になった。自分も帰国後マラリアを発症して大変だった。戦地では兵隊はまるで亡霊のようにジャングルをさまよい、マラリアと飢餓で死んでいった。こうした戦争の実相を語り継いでいかないと、頭でっかちな集団的自衛権論議に向かってしまう。

２　抑留所に関し新たに分かったこと

不透明な運営費

修道院を解体する時、入り口左側の院長室、抑留所時代は警備隊長室になっていた部屋から、小さな金庫が後ろ向きになって発見された。開けるとブループリントの設計図とフランス語で書かれた日誌が出てきた。また修道院が保管してきた財務記録の存在も明らかになった。それによって、建築に関わる院長と設計者スバガーとの契約の内容や金銭の流れ、工事を請け負った横浜の関工務店の取引先からの部品の発注などが詳しく分かった。また抑留所の不透明な運営費が浮かび上がってきた。国立公文書館所蔵の資料によると、国は抑留者 1 人当たり光熱費、食費、寝具代として 1 日 5 円を支給している。また 1 か月 500 円を賃貸料として修道院に支払うことになっていた。しかし実際は、寝具は一度入れただけで取り換えていないし、賃貸料はシスターの記憶では一度だけ 200 円もらっただけである。ただし戦後にまとめてもらった賃貸料を、小学校を

建てる資金にしたとも言われている。

抑留所の賃借料は内務省から県（警察部）に支払われ、県から修道院へ支払われるというルートだったが、運営費は県の特高課が途中で相当な額を内部留保していた可能性がある。警備隊関係者の話では、抑留費の中から、特高課の会議後の飲食を賄っていたようだとのことだった。

赤十字の缶入り食料

修道院の解体工事中には、戦争中に国際赤十字の慰問品として届けられたか、あるいは戦後米軍が投下したと思われる食料の缶も見つかった。大きなミルクやインスタントコーヒーや肉の缶で、取っ手を付けて容器として使いやすくしたものもあった。また羽目板を加工してチェスや将棋盤にしたものが 3 枚見つかった。ドアガラスに「PLEASE CAME IN」と書かれた子どもの落書きも含め、これら貴重な遺物は桜の聖母短大内のコングレガシオン・ド・ノートルダム記念室に展示してある。

抑留はその後の人生に大きな影響を残している。英国人船員クリス・ベストさんの父は戦後もトラウマに悩まされ、夜中にうなされて「たたかないでくれ！」と言うことがあった。50 代で癌で亡くなった。クリスさんは修道院を訪れた際に、2、3 時間は父が虐待されたことに対する怒りの感情に駆られたという。また英国貨物船の航海士だったオラル・オルセンさんも、事実を調べるために福島に来たが、その後に亡くなった。生存者も少なくなり、来訪する人もいない。

容器に加工された缶

３　福島県を取り巻く現状

石原環境相発言

私も福島原発事故で被曝した一人である。事故からしばらくして県民健康調査があり、事故直後数ヶ月間の行動を細かいアンケートのようなものに記入して提出したら、3 マイクロシーベルト/アワーという判定が出された。原因は震災直後に水や食料を求めて並んだことと、耕運機で畑を耕してヒマワリを植えたことだと思う。しかしこの 3 マイクロの数字の意味、健康にどういう影響があったのか、今後どうすればいいのかについて、全く説明は無かった。県民健康調査は多くの住民から批判され、回収率は４０％に届かず、この調査は頓挫してしまった。今も福島市や周辺の町内には除染した土を積み上げてブルーシートで覆った異様な風景がいたるところにみられる。政府は原発近くに中間貯蔵施設を建設し、そこに保管する予定だったが、プランがずさんなため避難した地権者らの住民に反対されている。建設地は今も線量が高く住むには厳しい現実があるのだが、そこを金銭で片付けようとしていると決めつけた石原環境相発言は激しく批判された。一方で福島市や周辺町の住民の間には中間貯蔵施設の早期建設を望む声も強い。中間貯蔵施設に対する国のあいまいな態度が、住民の意識を二分させている。

「美味しんぼう」による波紋

私の家も除染を受けてやっと空間線量が 0.2 マイクロシーベルトになった。しかし雨樋の下は都内では考えられないほど放射線量が高いホットスポットだった。しかしそんなことも知らず 3 年間を過ごしてきた。家のモニタリングは行政が指定する個所しか測定しないので、住民が立ち会って指示する必要がある。この除染は 1 回きりであり、問題も多い。子どもを産むには線量が

心配で県外で出産した家族もいる。住民健康調査とは別に 18 歳以下を対象に甲状腺の検査を行っているが、甲状腺癌の子どもが多く見つかり、現時点で 89 人にもなった。その理由も分からない。漫画「美味しんぼう」に鼻血が出るということや低線量被爆のことが描かれて問題になったが、多くの県民が抱く将来の健康不安に直接焦点をあてたので論議を呼んだ。低線量被爆により、10 年、20 年後に癌になるのではないかと不安が募る。１０年、２０年後にならないと答えが出ないというのも酷な話である。福島県民が持つ潜在的な不安、特にお子さんを持つ保護者の心配をぜひ皆さんに知ってもらいたい。福島県の人口は昨年から約 1 万 5000 人減った。廃炉には 40 年かかると言う。原発事故の原因も分からない。このような状況でなぜ原発の再稼働などができるのか。安全保障論議と経済優先策が進み、付け足しで原発事故の復興策が出てくる現状に、怒りがおさまらない。経済成長よりも、きれいな福島に早く戻せといいたい。

（小宮まゆみ）